片山東熊とその時代

塩　田　昌　弘

The Architecture in the Age of Tokuma Katayama

SHIOTA Masahiro

［目次］

序章
Ⅰ．宮廷建築家・片山東熊の生涯
Ⅱ．作品
（イ）　帝国奈良博物館
（ロ）　帝国京都博物館
（ハ）　表慶館
（ニ）　東宮御所
終章
図版
注と参考文献

序章

明治の建築家、片山東熊（1853年～1917年）ほど華やかな生涯を送った建築家はいない。現在、我々は、片山東熊の作品として次の様な名建築を見ることができる。

帝国奈良博物館本館（現在の奈良国立博物館）1894年
帝国京都博物館本館（現在の京都国立博物館）1895年
表慶館（現在の東京国立博物館構内の展示館）1908年
東宮御所（赤坂離宮、現在の迎賓館）1909年

ここ十数年来、美術館、博物館が著名な建築家—例えば、安藤忠雄（1941〜)、磯崎新(1931〜)、川崎清（1932〜)、黒川紀章（1934〜)、丹下健三（1913〜)、前川國男（1905〜1986)、村野藤吾（1891〜1984)、吉田五十八（1894〜1974)、坂倉準三（1901〜1969)、進藤繁（1942〜)、槇文彦（1928〜)、谷口吉郎（1904〜1979)、渡辺仁（1887〜1973)、白井晟一（1905〜1983）等により建築設計され話題となってきた。そして、それらのミュージアムで開催されている展覧会よりも、ミュージアムを建築作品として見学する来館者が増えてきている。この様な現象は、実は今に始まった事ではなかった。明治の建築家、片山東熊は、一世紀も前に、建物の魅力で観客をミュージアムに呼ぶ事を想定していたのである。この宮廷建築家・片山東熊の生涯を辿り、その建築の生成の歴史を明らかにしようと思う。

Ⅰ．宮廷建築家・片山東熊の生涯

かくすればかくなるものと知りながら
已(や)むに已まれぬ大和魂[1)]

嘉永六年（1853年）６月、極東艦隊司令長官ペリー（Perry, 1794〜1858）が浦賀沖に軍艦４隻を率いて来航し、徳川幕府に対し開国通商を要求した年の暮れの12月19日、長州藩士・片山文左とハルの四男として、東熊は生まれた。長男則和、二男中行、三男亥輔の男子四人兄弟の末っ子として育っていく。[2)] 東熊の少年時代は、激動の時代であった。蛤御門の変（1864年）後、反幕勢力の中心的存在となった長州藩を倒すべく、幕府は様々な策を弄した。しかし、高杉晋作（1839〜1867）の奇兵隊の活躍、坂本龍馬（1835〜1867）による薩長同盟により、倒幕を実行した長州藩は、薩摩藩と共に、明治時代に入り、政治、軍事、経済、文化の各方面にその影響力を増していくのである。

片山東熊は慶応元年（1865年）12歳で奇兵隊に入隊している。そして、明治元年（1868年）にはじまる戊辰戦争に山県有朋（1838〜1922）率いる討幕軍に従軍した。

あだ守るとりでのかがりかげふけて
夏も身にしむ越の山風[3)]

山県有朋が北越戦争中に詠んだ歌で、苦戦の様子が窺える名歌となっている。山県は和歌を好み、槍術をよくした。文武両道の武人であり、情に厚い人柄でもあった。人情は時には両刀の剣になる事がある。明治５年（1872年）陸軍大輔、陸軍中将・近衛都督となり、順風満帆であるかに見えた山県に、或る汚職事件の嫌疑がかけられたのである。山城屋事

件である。この事件について、『公爵山縣有朋傳』は次の様に記している。[4)]

山城屋和助は、長州の人。野村三千三と稱し、初め佛門に歸依し、後、還俗して奇兵隊に屬し、戊辰の役、公の部下として、北越方面に轉戰し功あり、維新の後、野に下りて商業を營み、公に頼りて、兵部省の御用商と爲つた人物である。和助は、兵部省より省金の借用を請ひ、其の商店を擴張し、店員を增加して、熾に商業を經營し、大小の軍需品を兵部省に納めたが、兵制改革の際とて、需要の激增に伴ひ、其の得る所の利益は巨萬に達し、彼の信用益々高く、前後數回に亘りて、省金六十四萬九千餘圓を借り入るゝことを得たと傳へらる。

その後、山城屋は生糸相場に手を出し、それが暴落した為、大損失を受け、パリに逃れた。しかし、返金することが出来ず、帰国し、陸軍省の応接室で割腹したのである。この事件に関係したとされた陸軍中佐、湯浅則和（東熊の長兄）は、裁判で武官免職、位記剝奪の判決をうけて引責辞職した。この事があって以来、山県有朋は、則和の弟、東熊に庇護を与えつづけ、後年、東熊が宮廷建築家と称される遠因を形成したのであった。[5)]

戦後、明治政府は、近代工業の育成、国家財政の確立のために官営の工部省を設置した。そして、明治４年（1871年）、工部省内に工学寮及び測量司を設置した。明治６年、東熊は、この工学寮を受験し、入学を果した。

明治10年（1877年）、西南戦争がおこり、英雄、西郷隆盛（1827～1877）が没したが、同年１月東熊は、工学寮が工部大学校となり、その一期生として造家学を学んでいる。[6)] 造家学科教授は、ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852～1920）であった。武士の心を持ちながら、建築の技術の道をひたすら精進する明治の青年の姿が彷彿と浮かんでくる。同期生として、辰野金吾（1854～1919）、曾禰達蔵（1853～1937）、佐立七次郎（1857～1922）等がいた。彼らは、ひたすら建築に関する学問、技術の習得に励んだ。

やがて、明治12年（1879年）11月、工部大学校造家学科から、日本の建築界の礎を築くこととなるコンドルの弟子で、日本人建築家が巣立っていった。[7)] 12月、片山東熊は、工部省営繕課技手として奉職し、以後、日本建築界をリードしていく事となる。とくに、洋風建築の導入・発展の上で主導的役割を演じる事となった。

以後、片山の設計又は関係した建築で主要なものを掲げてみよう。[8)]

〈公職として計画又は関与されたもの〉

有栖川宮邸室内装飾	明治17年（1884年）
北京公使館	明治19年（1886年）
宮城室内装飾	明治20年（1887年）
栃木県庁	明治22年（1889年）

江戸橋郵便局	明治24年（1891年）
行政裁判所	明治24年（1891年）
静岡御料局	明治25年（1892年）
沼津御用邸洋館	明治26年（1893年）
一番町官舎	明治26年（1893年）
芝離宮	明治26年（1893年）
奈良博物館	明治27年（1894年）
京都博物館	明治28年（1895年）
楠公銅像台座	明治31年（1898年）
塩原御用邸	明治40年（1907年）
霊南坂官邸	明治41年（1908年）
赤坂離宮	明治41年（1908年）
竹田官邸	明治43年（1910年）
帝室村野管理局	明治44年（1911年）
京都市皇居及二條離宮内防火設備用水道付設工事	大正１年（1912年）
明治天皇葬場殿	大正１年（1912年）
赤坂分厩庁舎	大正１年（1912年）
宮内省消毒所	大正１年（1912年）
宮内省自動車庫	大正１年（1912年）
宮内省主馬寮馬具置場	大正２年（1913年）
木戸侯勅撰碑	大正２年（1913年）
大久保侯勅撰碑	大正２年（1913年）
武庫離宮	大正３年（1914年）
楓山写真場	大正３年（1914年）
吹上覆馬場	大正３年（1914年）
照憲皇太后葬場殿	大正３年（1914年）
桃山陵	大正３年（1914年）
桃山東陵	大正４年（1915年）
京都御所春興殿	大正４年（1915年）
二條離宮饗宴場	大正４年（1915年）
宮中能楽場	大正４年（1915年）
建春門外朝集所	大正４年（1915年）

〈公務の余暇計画（設計）されたもの〉

日本赤十字社	明治23年（1890年）

伏見宮邸	明治24年（1891年）
一條公爵邸	明治24年（1891年）
山縣公爵邸	明治24年（1891年）
土方伯爵邸	明治24年（1891年）
細川侯爵邸	明治26年（1893年）
閑院宮邸	明治29年（1896年）
秋田県公会堂	明治32年（1899年）
北白川宮殿下銅像台座	明治35年（1902年）
池田侯爵邸（鳥取）	明治36年（1903年）
朝鮮総督府官邸	明治41年（1908年）
伊勢徴古館	明治41年（1908年）
表慶館	明治42年（1909年）
神奈川県庁舎	大正２年（1913年）

これらの建築を成し得た片山東熊を、世の人は、宮廷建築家と呼んでいるが当然の尊称であろうと思われるのである。

片山東熊を建築の世界で一般的に宮廷建築家と尊称する理由は、上記業績の様に、その建築家としての生涯を宮内省内匠寮に従事した事、離宮・宮家の調度品、皇室関係の建物に関与していた事などを指してそう呼ばれるのであろう。

明治19年（1886年）12月、皇居御造営事務局に出仕し、宮殿装飾調査のために、ドイツへ派遣された。明治20年（1887年）12月、宮内省内匠寮の匠師に任ぜられ、皇居御造営の残業掛専務を命じられた。この匠師とは、当時その技術関係の最高の地位であった。[9)]

明治21年（1888年）10月、東京帝国大学工科大学造家学図画授業を委嘱されている。工科大学教授には、辰野金吾が明治19年（1886年）４月よりすでに建築学を担当していた。[10)]

明治31年（1898年）８月、東宮御所御造営局の技監に任ぜられ、片山東熊の代表作、東宮御所（後年、赤坂離宮、現在の迎賓館）の責任者となった。さらに、明治37年（1904年）４月、内匠頭に任ぜられ、また、東宮御所御造営局技監を兼任した。ここに於いて、名実ともに片山東熊は、宮廷建築家として最高の地位に上り詰めたのである。[11)]また、大正元年(1912年)、明治天皇の大喪使事務官を命じられ、青山御葬場及び桃山御陵の造営を担当した。

おもしろきこともなき世をおもしろく
すみなすものは心なりけり[12)]

大正６年（1917年）、10月23日、その栄光の生涯を終えた。正三位、勲一等旭日大授章、宮中顧問官。

片山東熊が青山斎場に柩を覆う10月28日、畏友・辰野金吾（建築学会会長、工学博士）が次の様な弔詞を寄せている。人は柩を覆て、その真価が定まるというが、片山東熊の当時の評価がいかなるものであったか、この弔詞に簡潔に述べられている。名文であり、一部抜粋してみる。[13)]

君は明治十二年工部大學校に於て優等を以て其修むる所の建築學を卒へ工學士として世に出でゝより、今日に至る迄三十有八年間、君が設計せる建築は頗る多くして、住宅あり、病院あり、博物館あり、美術館あり、縣廳舎あり、郵便局あり、裁判所あり、海外公使館あり、是皆君が卓絶せる技倆を發揮せるものにして、中には明治年間の代表的良建築あり、君復震災豫防調査會委員、博覧會委員等となりて其の施設するものなきにあらざれども、是れ皆君が本領にあらず、所謂君が本領とは時勢の要求と君が學識技倆と君の性格と相待って、君をして竟に他建築技師と經路を異にせしめたるものにして、卽ち是宮殿建築の師宗（オーソリテー）たりしことなり。君は内匠寮技師より技監を經て、累進して建築技師の榮職内匠頭に至る、其間に君が設計監督に成る宮殿及び之に類する建物、之に附隨する屋舎は數ふるに暇あらずと雖も、省外の人多くは之を知るに由なく、唯其顯著にして人の仰望するもの四谷の高地に巍然たる東宮御所あるのみ、此建物や君が渾身の力を傾倒して築成せるものにして、宏壯堅牢匹儔世に罕なる東洋唯一の近代式宮殿なり、英國に於ては其功勞正に準男爵の榮を享くるに當るものなり、唯此建築を以てするも君を不朽に傳ふるに足る、況や兩度の御大喪に遭ひ桃山二大御陵の築造を全ふし、更に曠古の御大典に際し儀禮的數多の建物を新設するに於ておや

当時、第一級の建築家であり建築学会会長である辰野金吾が、片山東熊の建築史上の功績と人となりを率直に述べている。片山東熊がなぜ宮廷建築家と言われるかの理由が理解できよう。

Ⅱ．作品

（イ）帝国奈良博物館

明治時代、国立の博物館が、文化財の集中している東京、奈良、京都に設立された。それは、19世紀ヨーロッパではじまった万国博覧会の思想の影響と、文化財保護の考え方が根底に認められる。19世紀のヨーロッパおよびアメリカ等の先進国は、互に自国の文化、

産業等について他国に積極的に紹介し、国威を示そうとしたのである。例えば、嘉永４年（1851年）にイギリスで開催されたロンドン大博覧会などが良い例であった。イギリスは各国に出品参加を勧誘している。我が国は世界の列強に伍し、慶応３年（1867年）のフランスで開催されたパリ万国博覧会に参加した。この時は、徳川幕府と雄藩・薩摩藩が参加している。また、明治６年（1873年）のオーストリアのウィーン万国博覧会には、明治政府として正式に初参加した。この明治政府の初参加したウィーン万国博覧会について、『奈良国立博物館百年の歩み』[14)]は次の様に記している。

明治六年（1873）オーストリアのウィーンで万国大博覧会が開催されることとなると、明治政府は全国各地から特産物をはじめ書画骨董品や動植物の標本類など数多くの資料を集め、これらの資料を明治五年三月、二〇日間の予定で東京の湯島聖堂の博物館[15)]に陳列して公開すると共に、陳列品の中から重要なものを撰定してウィーン万国博覧会に出陳した。この万国博覧会出陳品の展示は国民に非常な感銘を与えたので、万国博覧会終了後、出陳品の返還を待って明治六年（1873）三月一日から五〇日間の会期で東京の上野山下門内で博覧会が開催された。この博覧会には万国博覧会に出張した係員が欧州各地で買入れて来た資料や諸国からの寄贈品、交換品なども展示し、さらに宮内省から貸与された明治天皇および皇后の御即位式や大嘗会の御衣服も加えられたので、異常な人気を呼び、会期は延期を重ねて、七月に至ってようやく閉会する程の盛況であった。

この様な状況のもとに、博物館の必要性を政府も国民も痛感し、やがて、国立の博物館設立の計画が進められていった。そして、

明治22年（1889年）５月16日、宮内省告示により、東京に帝国博物館、そして帝国京都博物館、帝国奈良博物館の設立が公布された。三館統括の帝国博物館総長は九鬼隆一が任命された。

明治25年（1892年）２月23日、本館建築設計の内匠頭（たくみのかみ）堤正誼、内匠寮（たくみのりょう）技師工学博士片山東熊、帝国博物館理事岡倉覚三が実地検分をし、29日から本館建築の工事を開始した。

様式は、木骨煉瓦造平屋でモルタル外装を施した様式のもので、清水組が施工した。基礎の石材は伊予大島産の花崗石、桁及び窓縁は相州産の沢田石を用いた。また、耐震のため堅牢を旨とするため窓を少なくし、光は屋上から採る工夫をしている。明治27年（1894）12月14日竣工、翌28年１月15日内匠頭堤正誼、内匠頭技師片山東熊立会いの下に引き渡しを完了した。[16)]そして、明治28年（1895）４月29日、帝国奈良博物館は開館した。（現在、重要文化財に指定されている。）

(ロ) 帝国京都博物館

帝国京都博物館は、明治22年（1889年）5月16日付宮内省達第六号で、正式に設置と職員構成が決定され、同日付の宮内省達第七号で評議員、学芸委員の制度が定められた。[17] さらに同日付にて帝国京都博物館制細則が制定された。明治23年（1890年)、宮内省内匠寮が博物館の設計監督を行うことが決定し、内匠寮技師・片山東熊がその担当者となった。

工事の状況について『京都国立博物館百年史』に次の様な記録がある。[18]

本館は建坪九百六拾余坪にて、煉瓦と鉄又は石材を以て成れる純然たる西洋造なり。基煉瓦は下京区大仏東川原町の田中卯兵衛と紀伊郡深草村木村惣三郎の両人が受負ひ、石材は静岡県川津沢田山の青石と伊豆大島の御影石となり。又屋根に用ゆる石材は宮城県牡鹿郡の玄昌石版にて、東京の玄昌石版商会其工事を受負ひて最早葺上げたり。既成工事中最も技術の巧妙なるは、本館入口の上部なる人像の彫刻なり。此彫刻は東京美術学校に於て懸賞して募れる絵画彫刻祖翁の像にして、其彫刻は有名なる東京の石工山崎喜三郎なり。

この記録から、本館破風装飾の毘首羯摩像と伎芸天像の木製原型は竹内久一作であり、[19] それを石材に彫刻したのは山崎喜三郎であったことがわかる。

さらに、『京都国立博物館百年史』を詳細に読み進むと、次の様な文章が目に入る。[20]

帝国京都博物館の建築は工事漸く捗りて、昨今六歩近くもすすみたるよし。就ては其の湿気を防ぎ、風気を通し、光線の透徹を十分にするなどの事共一覧したきより、京都美術協会員は特に許可を得て、昨日同館を拝観したるが、如何にも其の注意の至れること、流石に国宝を保存せらるゝ一大宝庫たるに負かず。火災のことは勿論、震災予防の工夫も行き届き、厚さ三尺と云ふ煉瓦の厚壁に多くの鉄杆を貫き崩解を防ぎたるなど、眼の視えぬ処に力を費せること少からず。(中略）屋根は銅を葺きたる上に瓦を施せる処あり。又石を畳める処あり。正面破風下の石材彫刻は、毘首羯摩、一方は技芸天にて、英姿美容相対して彫刻美術の巧妙なること、蓋し西欧人も観て一驚を喫せんか。

展示室の照明と採光、防火と耐震、そして破風の彫刻の美観など、博物館建築に当時としては格段の心くばりがなされている事が理解できる。この様にして、帝国京都博物館は、明治28年（1895年）10月を以て竣工し、明治30年（1897年）5月1日、開館した。建築は、「ドリック」式（Doric order)[21] で、宮内省内匠頭が監督し、内匠寮技師・工学博士片山東熊が担当した。[22]（現在、重要文化財に指定されている。）

(ハ) 表慶館

明治33年(1900年)4月、パリ万国博覧会が開催され、入場者は4708万人を数えた。この年の10月、夏目漱石がパリに赴き、万国博覧会を見物している。また、このパリ万国博覧会に洋画家の黒田清輝は名作『智感情』を出展し、銀賞を受賞している。黒田は文部省より、美術に関する制度・調査と絵画教授法の研究のため、フランスへの視察を命じられていたのであった。一方、洋画家の浅井忠は、前年10月、文部省からこのパリ万国博覧会のための臨時博覧会鑑査官を命じられて、この年4月にパリに着任したのであった。このパリ万国博覧会の主催国フランスは、美術品の展示会場で、過去1世紀の美術を回顧する展示を行った。即ち、ダビッド(Jacques Louis David, 1748~1825)以降のフランスの代表的な画家の名作を紹介したのであった。[23)] そこには、フランスが常に文明国であり、先進国であるという誇りが感じられる。後年、東京美術学校校長、帝国美術院院長に就任する正木直彦(1862~1940)は、この当時は帝国奈良博物館の学芸員であったが、このパリ万国博覧会の印象を次の様に述べている。[24)]

完全に平和な時で、世界各国が十分協力しうる時であった。それが成功の最大の原因であろうと思う。当時はわずか15年の後に人類最大の惨事となった世界戦争の如きが勃発しようとは、何人も予想しえなかった。今にして千九百年のパリ大博覧会を思う時、実に平和なユートピアであった。

春風駘蕩、順風満帆の季節に入った我が国は、明治33年2月11日(紀元節)に皇太子殿下(大正天皇)の御婚約が行われ、5月10日御成婚と定められた。東宮御慶事奉祝会という団体が設立され、その集めた資財で美術館を建設し、奉献しようと考えられたのである。即ち、表慶館は国民の善意により創られたといえる。東宮御慶事奉祝会の会長は、男爵千家尊福(いえとみ)、副会長は、松田秀雄と渋沢栄一であった。[25)] 渋沢栄一(1840~1931)は、明治大正時代の大実業家で、第一国立銀行、王子製紙、日本郵船等の大会社を設立、あらゆる産業の指導者であり財界の世話役であった人物である。奉祝会は下記の事を決めている。[26)]

一、美術館の位置を上野公園内と定めること。
二、建築設計は工学博士片山東熊氏に委託すること。
三、工事の監督は帝室博物館総長股野琢氏に委託すること。
四、本会は奉献美術館の建築竣工に至るまで存続するものとし、その事務は一切東京市役所に委託すること。
五、重要な事項については正副会長が協議に参与すること。

この時点で、片山東熊が表慶館の設計を担当することに決ったのである。また、この年の7月1日、帝室博物館官制が施行され、これまでの東京、奈良、京都にあった帝国博物館は帝室博物館と改称された。

表慶館の基礎工事、照明・採光については、『東京国立博物館百年史』に興味深い記述がある。[27)]

地盤線より十二尺の深さに掘り下げ、精密な地質試験のもとに地盤の硬軟の調査をなし、建物各部の重量を計算して基礎の幅を定めた。その幅は狭い部分で十六尺広い部分は二十八尺もあって、最初に砂利を敷きならして均一に床突きし、セメントコンクリートを厚さ五尺に打ち上げた。

この様に対震対策をした為、大正12年（1923年）9月1日の関東大震災で東京帝室博物館本館が被災したが、表慶館は無事であり、翌年から表慶館のみで展覧会を開催している。

陳列室の採光、照明については、当時電灯が一般に普及しつつあったが、博物館陳列室の採光を人工照明とするまでには至らず、この場合も自然光によることとなっていた。一階は外側窓から自然光を採り入れるので問題はないが、二階の二室は先に述べたように外側に窓を設けないで、天窓から自然光を採り入れるという方法であった。（中略）木製の格子天井とし、厚いすりガラスをはめ、内部に二重の白幕を張り光線の調節ができるよう装置し、また無窓室であるので要所に排気孔を設けたのである。[28)]

天窓からの自然光の採光は、現在の博物館では歓迎されないが、当時としては考慮した結果であったろうと思われる。

この様にして、表慶館の建築工事は進められ、明治34年（1901年）8月5日着工し、明治41年（1908年）9月29日竣工した。開館式は、翌年（明治42年）の5月21日であった。翌22日から一般公開している。開館式には、皇太子殿下、妃殿下、伏見宮妃殿下、朝香宮殿下、東久邇宮殿下をはじめ、花房宮内次官、渡辺内蔵頭、片山内匠頭（東熊）、千家東京府知事、渋沢商業会議所会頭、尾崎東京市長ほか、陳列品調査委員等が参列し、表慶館中央ホールにおいて行われた。[29)]（現在、重要文化財に指定されている。）

明治38年（1905年）、東郷平八郎（1847～1934）率いる連合艦隊は、日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を潰滅させ、日本の国威を世界にしらしめた。

神明はただ平素の鍛錬に力（つと）め戦はずしてすでに勝てる者に勝利の栄冠を授くると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者よりただちにこれをうばふ。古人曰く、勝って兜の緒を締めよ。[30)]

（二） 東宮御所

降る雪や明治は遠くなりにけり[31]

東宮御所は、現在、迎賓館として、諸外国の首相、大使等が来賓として来日された時の応接に使用されている。この建物は、片山東熊の代表作であるばかりでなく、明治洋風建築の名作として今日に伝えられている。

明治32年（1899年）7月起工し、明治42年（1909年）6月に竣工した。地上2階、地下1階、建築面積4553坪、建坪1566坪の洋風宮殿建築である。[32] その様式は、17世紀のフランスのバロックに想をえている。ルイ14世のルーヴル宮殿やヴェルサイユ宮殿の如く華麗であり且つ威厳と力強さを表現する宮廷建築を基本にした。正面の玄関を中心に、鳳凰が翼を広げた様な右対称の外観および平面性を示している。[33]

片山東熊は、アメリカに出張し、耐震のための鉄骨を購入、使用している。煉瓦や石の建築から鉄骨や鉄筋コンクリートの建築へ移行する初期の頃の建築といえよう。[34]

『建築雑誌』（第155号）に、アメリカから帰朝する片山東熊の記事が載っている。[35]

赤坂御所御造營建築主任たる工學博士片山更（ママ）熊氏は過般來取調しべの爲め米國へ出張中なるが去る十月廿日バンクーバーを出發歸朝の途に就かれたる由なれば近々歸朝せらるべし

アメリカのカーネギー会社製の鉄材を鉄骨構造に使用するため、アメリカに出張したのである。また、暖房設備もアメリカのウォーカー＆シャンバー社に設計を委託し、自働温度調節装置附き温風暖房方式を採用した。[36]

東宮御所は、鉄骨を芯に内外壁は煉瓦を積み、外壁は表面に花崗岩を張った。この花崗岩は、茨城県真壁郡樺穂雨引西村の花崗岩を採掘し使用した。[37] また、室内装飾や壁面については、フランス美術に精通している美術鑑識家、今泉雄作（1850～1931）や洋画家、黒田清輝（1866～1924）が担当した。その他、浅井忠（1856～1907）、岡田三郎助（1869～1939）、荒木寛畝（1831～1915）が協力した。建築と美術・工芸の総合美を構築している。[38]

片山東熊の友人、曾禰達蔵（1852～1937）は、赤坂離宮について次の様に述べている。[39]

君ガ手ニ成レル建築物ノ中ニハ許多永世不朽ノ良建築アリ就中奉獻美術館ノ如キハ最タルモノナルガ君ガ特ニ畢生ノ精神ヲ傾注シテ設計シ監督シタルモノハ其レ彼ノ東宮御所ナル哉此建築ヤ君ガ前後六七回ノ海外出張ヲ以テ其學殖ノ豊富ニ見聞ノ宏博ヲ加ヘ來リ之ヲ君ガ圓熟セル一種獨特ノ意匠ノ上ニ加味シテ以テ成ル所ノモノニシテ外觀内容構造設備總テ現代科學ノ知識美術ノ精

華ヲ集合シタル東洋唯一ノ新式宮殿建築ナリ此一大建築アリ君ハ以テ十九世紀二十世紀間ノ大建築家トシテ永世芳名ヲ流スベシ

終章

片山東熊は、フランスの宮廷建築を自らの建築の範とした。特にルーヴルやヴェルサイユ宮殿のスタイルを研究した。その成果である東宮御所（赤坂離宮、迎賓館）は、世界で最後に建築されたヨーロッパ系の宮廷建築となった。[40]

明治27年（1894年）、帝国奈良博物館が竣工するが、この時の内閣総理大臣は、伊藤博文、枢密院議長は、山県有朋である。また、明治28年（1895年）、帝国京都博物館が竣工するが、この時も伊藤博文と山県有朋が総理大臣と議長にそれぞれ就任している。

明治41年（1908年）、表慶館（東京帝室博物館）は竣工するが、この時、内閣総理大臣は桂太郎、枢密院議長は伊藤博文であった。さらに、明治42年（1909年）、東宮御所が竣工したが、この時の内閣総理大臣は、桂太郎であり、枢密院議長は伊藤博文であった。

これらの史実から、長州藩閥の威光が、片山東熊を明治の宮廷建築家へと押し上げ、明治政府の輝ける記念的建築の完成を見るに到ったかと言えよう。しかし、片山東熊の才能、努力、使命感が無ければ、あの様な建築が実現しえなかったであろう。工部大学校時代、イギリスから来日したコンドル先生に学んだゴシックやクラシックの歴史的建築様式の美、切磋琢磨した青春時代の学生たち―辰野金吾、曾禰達蔵、佐立七次郎、宮伝次郎等。様々な人との出会いが、東熊の建築様式を生成していくのである。戊辰戦争の頃、会津総攻撃前夜の、やりきれない緊張感を後年、時折、正三位、勲一等旭日大綬章を授与された東熊は思い出しては懐かしんでいたと思われる。一人の青年の不屈の意志の持続と飛躍が、日本建築史に燦然と輝く建築を残したといえる。

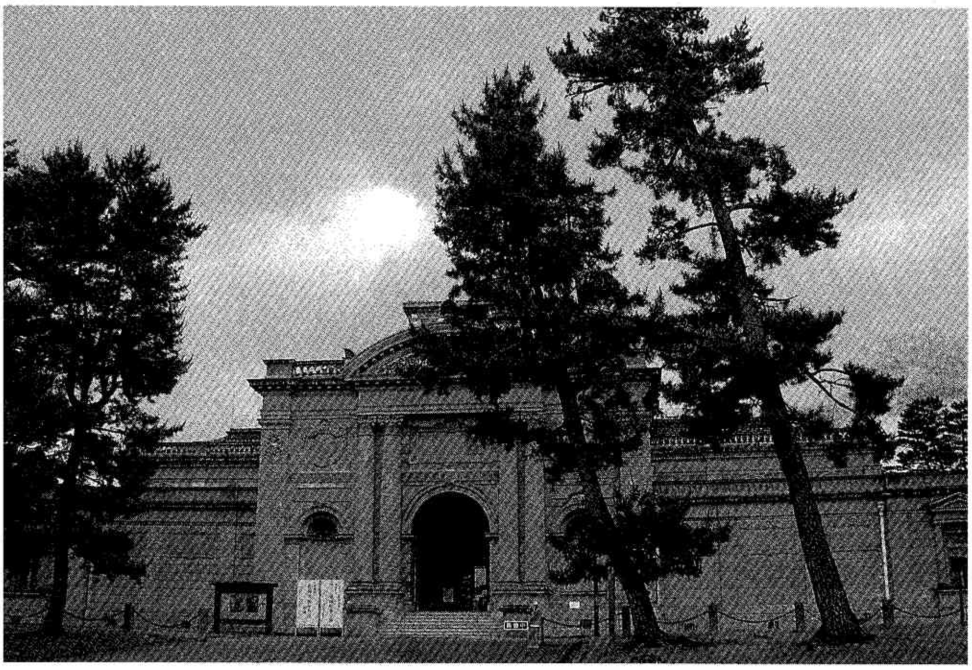
明治という時代は、強烈な個性ある政治家が登場している。そして、彼らは、多くの青年に人生の途上において大きな影響を与えた。この時代、政界・軍部に大きな影響力を持った１人の人物の詩を挙げてこの小論の結びとしたい。[41]

南洲を弔(とむら)ふ

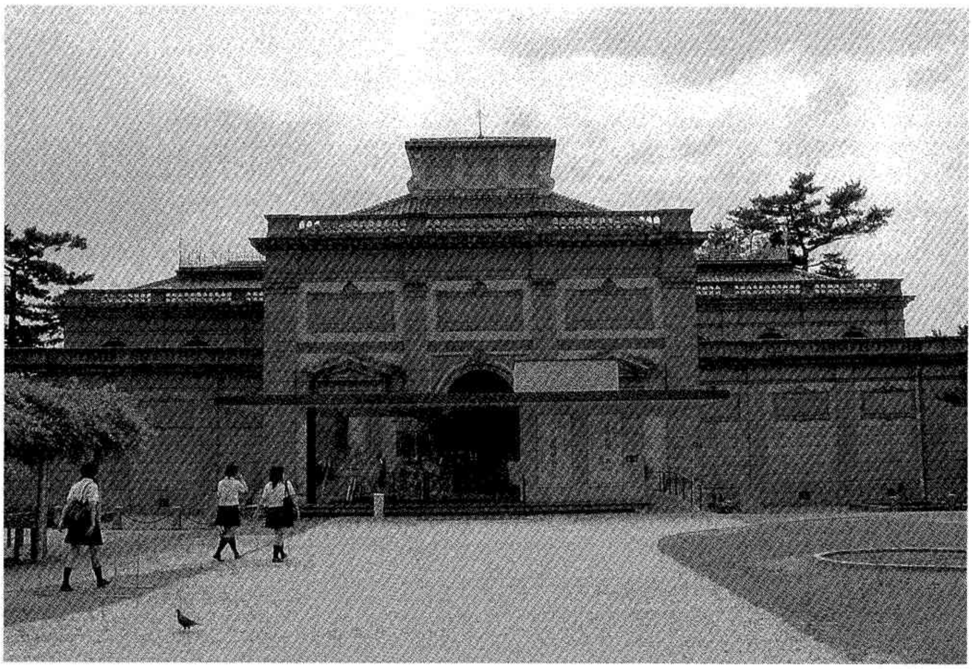
亡(な)き友　南洲氏[42]
風雲　大是(だいぜ)を定む
衣(い)を払って　故山(こざん)に去る
胸襟(きょうきん)淡(あわ)きこと水の如し
悠然(ゆうぜん)として　躬(みずか)ら耕すを事とす

嗚呼　一高士
只　道ふ　自ら正に居ることを
豈国紀を紊さんことを意はんや
図らず　世変に遭ひ
甘んじて賊名の訾を受けんとは
笑ひて此の残骸を擲ち
以て数弟子に附す
毀誉は皆皮相
誰か能く微旨を察せん
唯精霊の在る有り
千載　知己を存せん

図 版

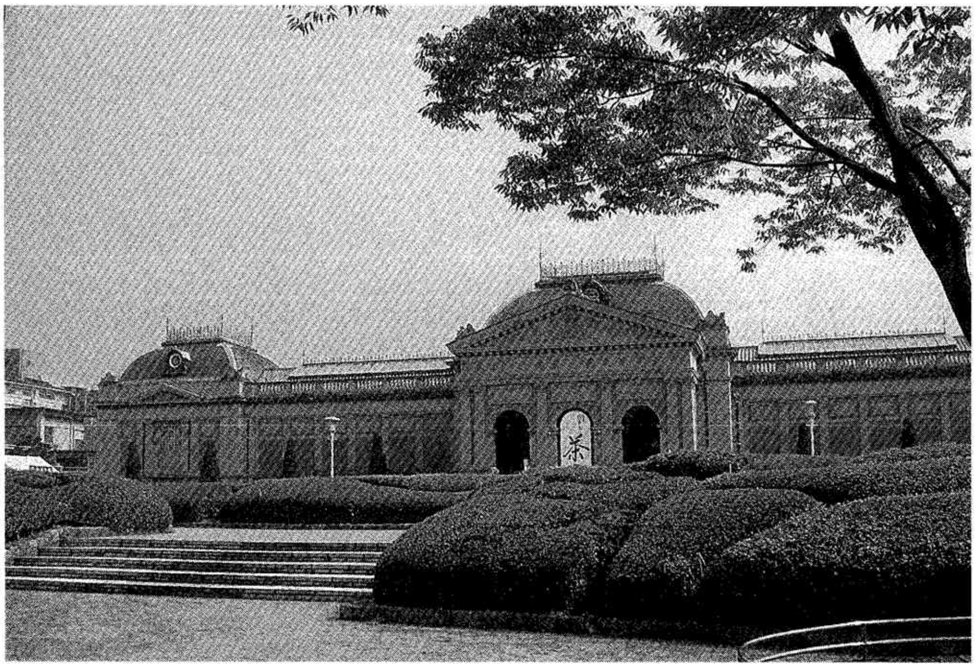


〔1〕帝国奈良博物館：現在の奈良国立博物館本館正面

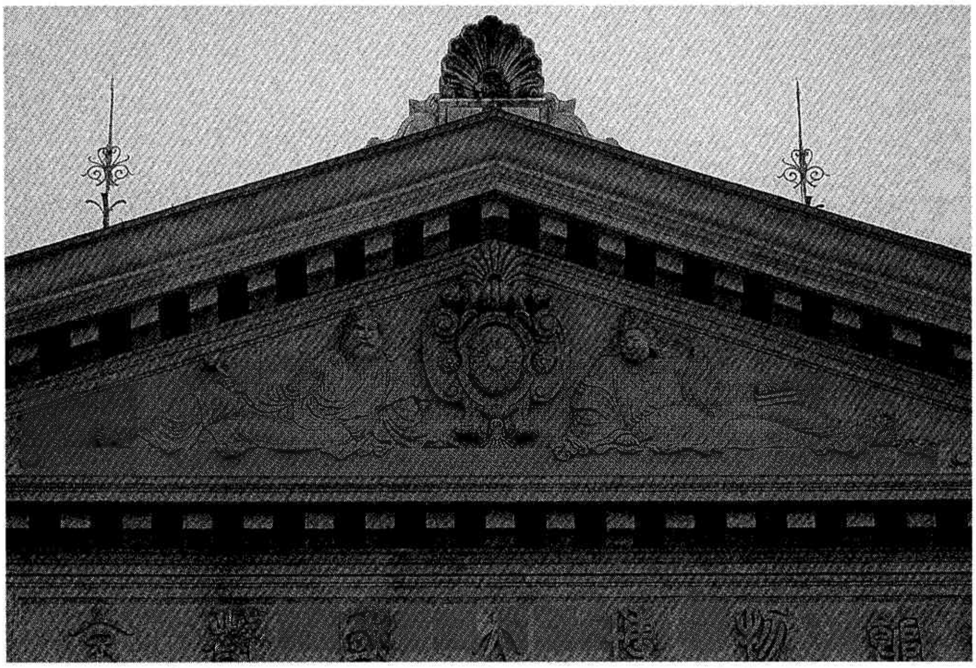


〔2〕奈良国立博物館裏正面

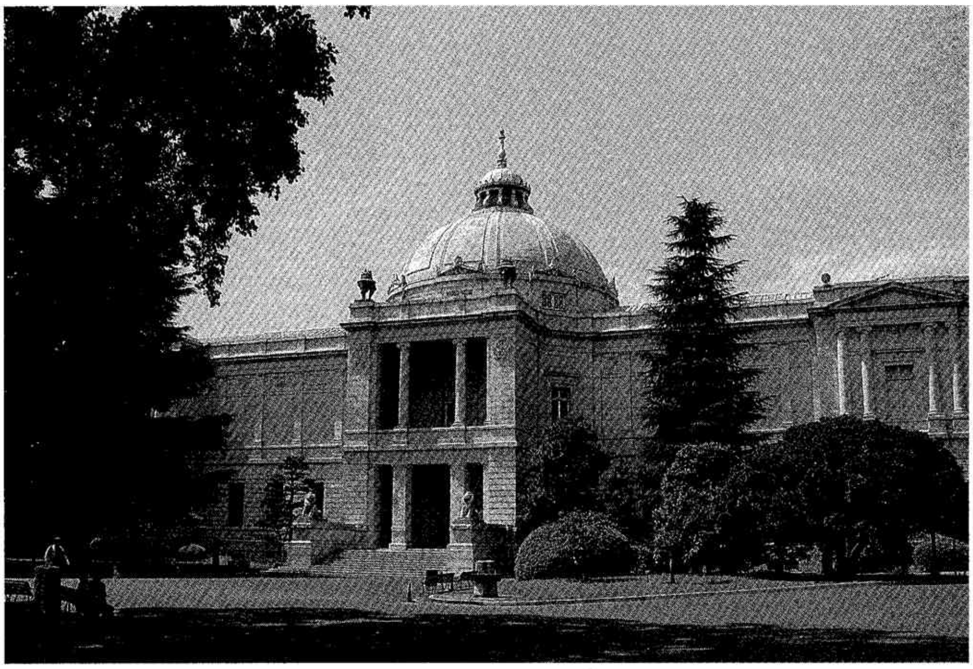
〔3〕奈良国立博物館本館陳列風景（第1室）



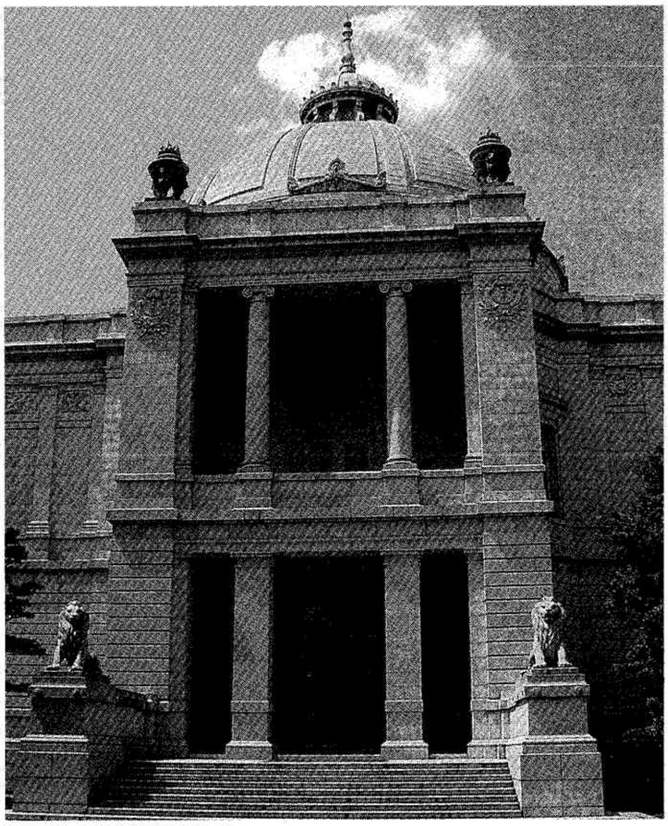
〔4〕帝国京都博物館：現在の京都国立博物館本館正面



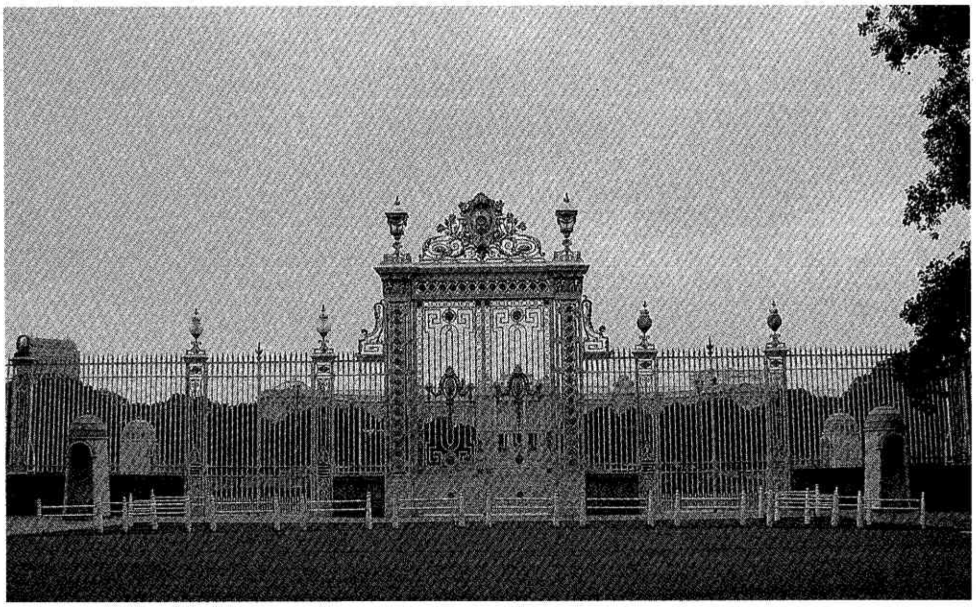
〔5〕京都国立博物館本館破風　毘首羯摩像と伎芸天像



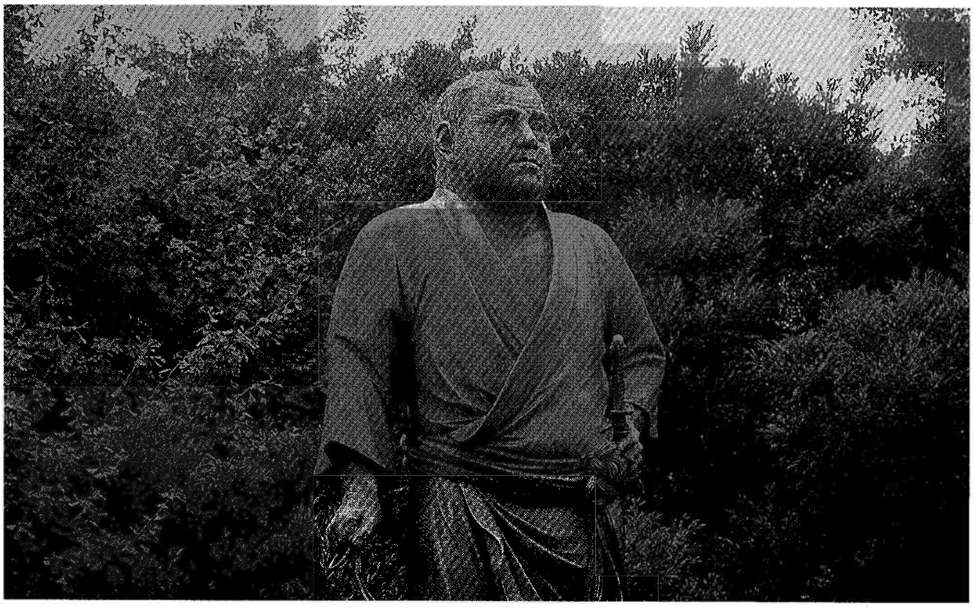
〔6〕表慶館正面



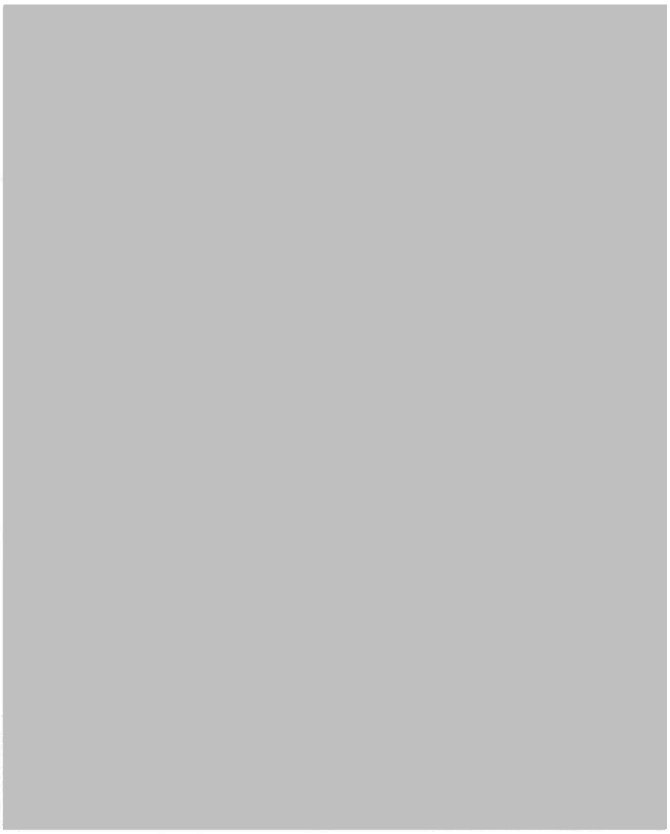
〔7〕表慶館玄関



〔8〕東宮御所：赤坂離宮：現在の迎賓館



〔9〕西郷隆盛（1827〜1877）



〔10〕片山東熊（1855〜1917）

（図版の〔1〕〜〔9〕の撮影は、塩田昌弘、〔10〕は奈良国立博物館所蔵）

注と参考文献

1）『幕末の長州〜維新志士出現の背景〜』田中彰著、p. 82、中公新書86、中央公論社、1990. 3. 20　吉田松陰（1830〜1859）幕末の志士、教育家、長州藩士。安政元年（1854年）、米艦渡来に際し、密航を企て、捕えられた。萩に松下村塾を開いた。
『武士道』新渡戸稲造著、岬龍一郎訳、p. 162〜p. 166、PHPエディターズ・グループ、2004. 1. 5
2）『日本の建築［明治大正昭和］2様式の礎』小野木重勝著、p. 141、三省堂、1979. 4. 15
3）『山県有朋』藤村道生著、p. 35、吉川弘文館、1986. 11. 1　山県有朋（1838〜1922）山口県出身の政治家、軍人、元老。吉田松陰の松下村塾に学び、奇兵隊を率いて活躍した。維新後、大村益次郎のあとを継ぎ、軍制の中心人物となった。
『奇兵隊日記一』日本史籍協會編、東京大學出版會、平凡社、1971. 3. 10
『奇兵隊日記二』日本史籍協會編、東京大學出版會、平凡社、1971. 4. 10
『奇兵隊日記三』日本史籍協會編、p. 191，p. 201、東京大學出版會、平凡社、1971. 4. 10
『奇兵隊日記四』日本史籍協會編、小西四郎執筆「解題」p. 719〜p. 739、東京大學出版會、平凡社、1971. 5. 10
4）『公爵山縣有朋傳　中巻』徳富猪一郎編述、p. 281、山縣有朋公記念事業會、1933. 2. 1
5）『日本の建築［明治大正昭和］2様式の礎』小野木重勝著、p. 142、三省堂、1979. 4. 15
6）『日本の建築［明治大正昭和］2様式の礎』小野木重勝著、p. 143、三省堂、1979. 4. 15
7）『明治の建築』桐敷真次郎著、p. 88、本の友社、2001. 4. 10
8）『建築雑誌』造家学会編、p. 7〜p. 8、12月号、vol. 31、1917
9）『日本近代建築史ノート〜西洋館を建てた人々〜』村松貞次郎著、p. 142、世界書院、1965. 9.
10）『東京大学百年史　部局史三』東京大学百年史編集委員会、p. 9、東京大学、1987. 3.
11）『日本近代建築史ノート〜西洋館を建てた人々〜』村松貞次郎著、p. 143、世界書院、1965. 9.
12）『高杉晋作〜維新前夜の群像（1）〜』奈良本辰也著、p. 195、中公新書60、中央公論社、1988. 1. 25
高杉晋作（1839〜1867）長州藩士、勤皇の志士。吉田松陰に師事、久坂玄瑞と並称された。奇兵隊総監となる。
13）『建築雑誌』造家学会編、辰野金吾執筆「正員宮中顧問官正三位勲一等工學博士片山東熊、君を弔ふ」、12月号、vol. 31、1917
14）『奈良国立博物館百年の歩み』奈良国立博物館編集・発行、p. 3〜p. 4、1995. 4. 21
15）明治5年（1872年）3月10日に東京湯島聖堂の大成殿において文部省の博物局が博物館の名によって、我が国最初の博覧会が開催された。
16）『奈良国立博物館百年の歩み』奈良国立博物館編集・発行、p. 10〜p. 11、1995. 4. 21
17）『京都国立博物館百年史』京都国立博物館編集・発行、p. 64、1997. 10. 20
18）『京都国立博物館百年史』京都国立博物館編集・発行、p. 100、1997. 10. 20
19）『日本の神仏の辞典』大島建彦・薗田稔・圭室文雄・山本節編者、山下哲郎執筆、大修館書店、p. 1079、2001. 7. 1
竹内久一（1857〜1916）は、江戸に生まれ、明治・大正時代に彫刻家として活躍した。明治14年（1881年）内国勧業博覧会で牙彫で受賞した。1891年、東京美術学校の教授となる。1893年、シカゴ万国博覧会に『伎芸天』を出品し好評を博した。伎芸天は仏教の天部の1つで、天女とされ、福徳を司どり、左手に花を盛った皿を持っている。毘首羯磨はインドの美術工芸の神で主に建築・彫刻を司どり、仏像を刻んだといわれている。
20）『京都国立博物館百年史』京都国立博物館編集・発行、p. 101、1997. 10. 20
21）『図説世界建築士　第11巻　バロック建築』クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ著、加藤邦男訳、p. 266、本の友社、2001. 3. 10
ドリス式オーダーとは、ギリシア建築の3種の基本オーダーの一つ。ギリシア本土、ペロポネソス半島やギリシア植民市に用いられた、もっとも古く単純な形のオーダーである。柱礎を欠き逆饅頭形の

柱頭を持つ。

22)『京都国立博物館百年史』京都国立博物館編集・発行、p.103、1997.10.20

23)『現代日本美術全集16　浅井忠／黒田清輝』鈴木健二執筆「浅井忠の生涯と芸術」、p.110～p.111、集英社、1981.10

24)『改訂版　万国博覧会　技術文明史的に』吉田光邦著、p.104～p.105、日本放送出版協会　NHKブックス477、1985

25)『東京国立博物館百年史』東京国立博物館編、p.384～p.385、第一法規出版株式会社、1973.4.30

26)『東京国立博物館百年史』東京国立博物館編、p.387、第一法規出版株式会社、1973.4.30

27)『東京国立博物館百年史』東京国立博物館編、p.390、第一法規出版株式会社、1973.4.30

28)『東京国立博物館百年史』東京国立博物館編、p.392、第一法規出版株式会社、1973.4.30

29)『東京国立博物館百年史』東京国立博物館編、p.395、第一法規出版株式会社、1973.4.30

30)『坂の上の雲　六』司馬遼太郎著、p.332、文藝春秋、1978.10.1　東郷平八郎（1847～1934）元帥、海軍大将。薩摩藩の海軍に入り、後ち、日本海軍軍人となる。1871年から1878年まで英国に留学する。1903年、連合艦隊司令長官に任ぜられ、1905年、日本海海戦で敵前回頭戦法でロシア艦隊を壊滅させた。なお、今年は、日露開戦から100年目にあたる。

31)『新訂国語図説』井筒雅風・内田満・樺島忠夫共編、p.227、京都書房、1994.1.10
中村草田男（1901～1983）俳人、中国福建省に生まれ、東大文学部卒業。水原秋桜子に師事、「ホトトギス」同人となる。正岡子規の写生を受け継いだ。

32)『日本の建築［明治大正昭和］２様式の礎』小野木重勝著、p.158、三省堂、1979.4.15

33)『日本近代建築史ノート～西洋館を建てた人々～』村松貞次郎著、p.147～148、世界書院、1965.9

34)『日本近代建築史ノート～西洋館を建てた人々～』村松貞次郎著、p.148、世界書院、1965.9

35)『建築雑誌第155号』建築学会、p.280、1899.11.25

36)『日本の建築［明治大正昭和］２様式の礎』小野木重勝著、p.165～p.166、三省堂、1979.4.15

37)『日本の建築［明治大正昭和］２様式の礎』小野木重勝著、p.165、三省堂、1979.4.15

38)『明治の建築』桐敷真次郎著、p.121、本の友社、2001.4.10
『日本近代建築史ノート～西洋館を建てた人々～』村松貞次郎著、p.149、世界書院、1965.9

39)『建築雑誌』造家学会編、曾禰達藏執筆「弔詞」、p.8～p.9、12月号、vol.31、1917

40)『日本の近代建築～幕末・明治篇～（上）』藤森照信著、p.252、岩波新書（新赤版）、2001.2.19

41)『勝海舟全集20』勝海舟全集刊行会代表江藤淳、p.319～p.320、講談社、1972.11.13　勝海舟（1823～1899）幕末の旗本。蘭学を修め、砲術及び航海術を学ぶ。1860年、幕府の遣米使節に随行、咸臨丸艦長として太平洋をわたる。幕府海軍の建設に尽力した。王政復古後、征東軍と話しあい無事に江戸城を開城させた。明治時代、海軍卿参議。
『それからの海舟』半藤一利著、筑摩書房、2003.12.20
坂本龍馬（1835～1867）幕末の志士。高知城下本丁筋に、郷士坂本長兵衛直足の次男として生まれた。1853年、江戸に行き、北辰一刀流千葉定吉道場に入門、1858年、千葉定吉より「北辰一刀流長刀兵法目録」を受けた。1861年、武市半平太（1829～1865）の「土佐勤王党」に加盟するが、1862年、脱藩し、勝海舟の門下生となる。1863年、海舟の尽力で、神戸の勝塾塾頭となった。1864年、海舟との関係で東奔西走し、西郷隆盛、横井小楠らと意見を交わし見聞を広めた。1866年、薩長同盟を成立させた。1867年、「船中八策」を起草し、1868年、新政府は「船中八策」を基に「五箇条の御誓文」を発表した。これは、明治政府の新政の大方針となった。『高知県立坂本龍馬記念館～坂本龍馬年表～』（館案内）
『坂本龍馬　歴史の舵をきった男』河出書房新社、2003.6.30
『山岡鉄舟』　小島英熙著、日本経済新聞社、2003.6.26

42)西郷隆盛（1827～1877）幕末・明治初期の政治家。鹿児島城下薩摩藩下級武士の家に生まれる。南洲は号。1866年、薩長同盟結成に参同する。1867年、王政復古の計画に尽力し、江戸城攻撃にあたって、

勝海舟と会談し無血入城の方針をとる。
1873年、陸軍大将、参議兼務。征韓論が入れられず、鹿児島へ帰郷。1877年2月、西南戦争を起すが、9月鹿児島城山に死す。
1889年、国賊の罪を許され、正三位追贈される。1898年、上野公園に高村光雲（1852～1934）作の銅像が建てられる。

幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し、
丈夫は玉砕し甎全を愧づ。
一家の遺事、人知るや否や、
児孫の為に美田を買わず。

『西郷隆盛』池波正太郎著、東京文藝社、1982. 5. 15
『海音寺潮五郎全集第11巻　西郷隆盛』海音寺潮五郎著、朝日新聞社、1970. 3
『西郷南洲展』図録、霊山歴史館、1976. 10
『大西郷遺訓』林房雄著、新人物往来社、1977. 4. 20
『西郷隆盛』高野澄著、徳間書店、1990. 4. 15
『国にも金にも嵌まらず～西郷隆盛・新伝下』鮫島志芽太著、p. 217、サイマル出版会、1990. 9
『西郷隆盛　物語と史蹟をたずねて』童門冬二著、成美堂出版株式会社、1995. 2. 15
『西郷隆盛』安藤英男著、学陽書房、1997. 12. 10
『巨眼の男　西郷隆盛(一)、(二)、(三)』津本陽著、新潮社、2003. 12. 10、2004. 1. 21、2004. 1. 21

※本論文執筆にさいし、ドキュメンタリスト中島理壽氏の助言、資料紹介の協力があった。関西学院大学図書館の『東京国立博物館百年史』、『京都国立博物館百年史』、『奈良国立博物館百年の歩み』を根底資料とした。また、歴史上の人物の紹介については、坂本太郎監修『日本史小辞典』山川出版社、1963年を参考とした。

キーワード：片山東熊　宮廷建築家　迎賓館
Keywords：Tokuma Katayama，architect of the Imperial Court，guest house